日中友好新聞

発行所
日本中国友好協会
〒111-0063東京都
台東区浅草橋5-2-3
鈴和ビル5階
電話03(5839) 2140
Fax03(5839) 2141

日本中国友好協会
札幌支部編集
電話011(814)8658
Fax011(814)8658

第30回 10・9中国人殉難烈士 慰霊の集いを開催

10月9日、室蘭市イタンキ浜において「第30回中国人殉難烈士慰霊の集い」が開催され、49人が参列しました。

挨拶をする松原剛代表

参列者全員で黙祷を捧げた後、松原剛実行委員会代表（日中友好協会室蘭支部長）が挨拶に立ち、コロナ禍のまだ不安が残る中、このようにたくさんの方々の参列を頂き第30回を迎えたことに感謝を述べました。

さらに「集い」発足の経緯と、強制連行・強制労働の実態。それに対する日本政府と司法の対応を批判しました。

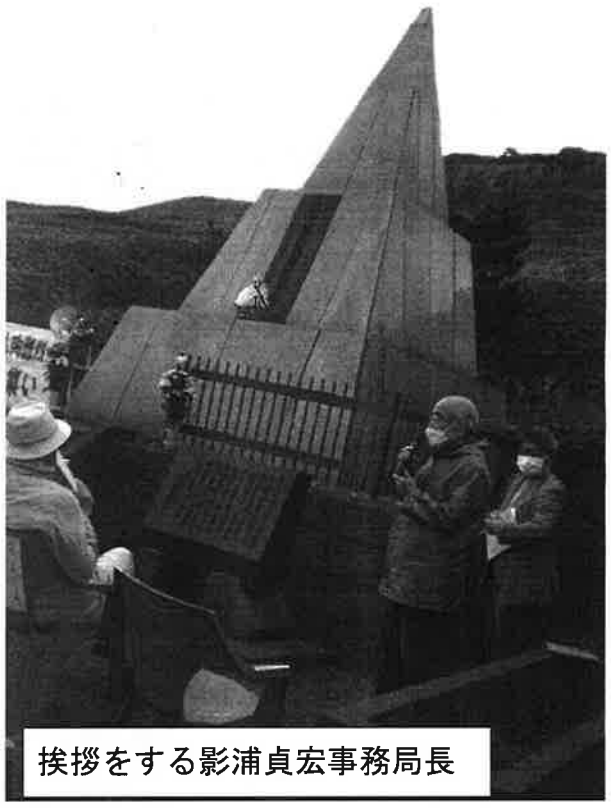
同時にロシアのウクライナ侵攻と、それを口実に中国敵視と軍拡を進める政府に対して深い憂慮を述べました。

参列者全員で献花の後、劉亜明中華人民共和国総領事の追悼の言葉が代読され、室蘭工大中国人学友会趙岩代表、室蘭市青山剛市長、室蘭市議会児玉智明議長の哀悼の言葉が奉じられました。

日中友好協会北海道連の影浦貞宏事務局長が挨拶に立ちました。

「私ども、日中友好協会北海道支部連合会は、三つの慰霊を大きな柱として取り組んでおります。

一つは今年57回を迎えた『中国人殉難者全道慰霊祭』、もう一つはここ室蘭における『10・9中国人殉難烈士慰霊の集い』、いま一つは当別町における『劉連仁生還碑を伝える会』です。



挨拶をする影浦貞宏事務局長

私ども日中友好協会にこんな質問が寄せられることがあります。

『このような慰霊祭をいつまで続けられるのですか』と、それに対してこう答えています。『本来こうした慰霊祭は強制連行を謀った国や北海道、そして三万九千人の中国人に強制労働をさせ、七千人もの犠牲者を出した、事業者が、心からのお詫びと慰霊、そして補償をしなければなりません。しかしながら現在に至っても補償しないばかりか謝罪の言葉もありません。私たちは国や道、事業者が心からの謝罪と補償、慰霊をされるまで、彼らに成り代わって皆様と共に続けなければならないと考えています』と応えています」と述べました。

合唱団「あすなろ」の有志の方々の追悼の歌が流れる中、イタンキ浜は例年になく秋晴れの天気で、室蘭の方々が植えられた花が、美しく咲き誇っていました。

募金の御礼

会費・準会費等の納入時に募金をお寄せいただきました。ご芳名を紹介し御礼に代えさせていただきます。

木村周二、小内浩、山田富雄、高島勝、菊地三郎、大澤勉、猫塚義夫、生駒正尚、亀田信夫、斉藤啓治、旗手繋雄

（敬称略）

文革終息・毛沢東死去

劉連仁さんの思いで（19）

日中友好協会北海道連　会長　鴫谷　節夫

「羊頭狗肉」

”劉さんの思い出はいつ出てくるんだ？”と読者の皆さんの声が聞こえるような気がします。羊頭狗肉はちょっと意味がずれますが、私としてはそんな気持ちで反省しながら文革という迷路から抜け出ることが出来ません。

習近平の権力集中を見ると文革の悪夢がよみがえる思いに捉われます。・

「文革の終息」

私が、田浦さんのあとを継いで慰霊祭の事務局の責任者になるのは第11回全道慰霊祭からです。この年１９７６年９月毛沢東が死去しました。翌１９７７年８月中国は「文化大革命終息宣言」を出します。

私は浅はかにも、これでもう大丈夫、日中友好運動も文革前の「熱烈歓迎」に無条件に戻るものと信じていました。そう思い込んだのには、全く根拠がないわけではありません。

中国大使館から弔電

私たちは「終息宣言」の数年前から全道慰霊祭の案内を中国大使館に出していました。１９７８年８月27日の第13回全道慰霊祭に中国大使館から電報が届いたのです。

日本共産党小樽地区委員会が発行する「おたる民報（１９７８年９月３日号）」には次のとおり紹介されています。

中国大使館から電報　実行委の友人に感謝

全道慰霊祭実行委員会では、毎年欠かさず、中国大使館に案内状を出してきましたが梨の礫、ところが、ことしはじめて大使館から弔電がとどき、その中に「・・・実行委員会の友人に感謝・・・子々孫々にいたる友好に共に努力を・・・」とありました。

中国大使館から寄せられた弔電は、13年間慰霊祭を取組んできた実行委員を感動させました。しかしその後また梨の礫で、やがて文革後の対外関係での大国主義的態度が明らかになって来ます。

（つづく）

伊藤千代子のロケ地をたどる長野平和と文化の旅

「満蒙開拓平和記念館」をたずねて

細川　久美子

日中友好協会の企画で２０１７年南京・上海、２０１８年北京・天津を訪問して、日本の侵略の歴史を見てきた。なぜ、長野県に満蒙開拓平和記念館が存在するのかと疑問に思いながら、三沢事務局長の講話を受けた。

かって、13年間だけ中国東北地方に存在した満州国。中国の人たちの土地と家を安く買収し立ち退かせた耕作地に、国策として開拓移民が推進された。満蒙開拓団は日本から27万人、長野県からは３万３千人と、全国トップの人数が送り出された。また、平和記念館のある飯田下伊那地域は県の４分の１と、最も多くの開拓団を送り出した地域であった。要因は、養蚕業の衰退による経済困窮と耕作面積の狭さである。「満州に行けば、20町歩の地主になれる」、送り出した村が補助金を得られる分損移民が、官民挙げ積極的に勧められた。

満蒙開拓平和記念館前の細川久美子さん

満蒙開拓青少年義勇軍

満蒙開拓平和記念館（図録）より引用

満面の笑みの少年達の写真。満蒙開拓少年義勇軍として集められた14～15歳の少年達であった。２カ月間の訓練後、ソ連国境近くに入植し、国境警備の任務に充てられたのである。

驚いたのは終戦直前まで、全国から開拓団が送り込まれていた。８月９日、ソ連軍の侵攻により、満州の果てしない荒野を逃げ惑う開拓団の逃避行は惨劇を極めた。27万人のうち8万人が満州で亡くなり、殆どが病死であった。ソ連軍と戦うはずの関東軍は、開拓団や一般住民に何も知らせず、３か月前にすでに南へ後退していた事実に怒りを覚えた。

残留孤児の父と言われる山本慈昭さんの活動も１室を充てられていた。館の近くにある長岳寺内の日中友好不再戦の碑を時間の都合で見学出来なかったことが心残りである。

加害の歴史を伝える時、歴史の事実を積み重ねて、丁寧に説明することを心がけていると事務局長さんが言われたように、修学旅行の中学生に語り部ボランティアの方々が奮闘していた。

弘田三枝子の大ヒット曲「人形の家」、終戦時、１５５万人の日本人が満洲から日本に帰ることを許さなかった思いを、なかにし礼が作詞に込めたと聴く。館内には引揚げに命をかけた丸山邦雄さんの資料が存在した。出身地の長野県飯山市では、民間人として１０５万人の引揚げに尽力した功績を後世に語り継ぐプロジェクトが作られていた。中国訪問の時の点の記憶が線としてつながり、戦争がいかに悲惨であるかを学んだ平和と文化の旅であった。